



となりのおやじ

- ストックホルム郊外の近所付き合い -

レグランド つかぐち 塚口 としこ 淑子

ノルディック出版・代表

また、となりのおやじに文句をいわれた。いつものように、両家の敷地の境界線となっている垣根についてである。

両家の敷地は2メートルくらいの高さの植木で区切られている。高さや幅を切り揃えたりは、それぞれが自分側を行うことになっている。毎年、春から夏にかけて新芽が出そう頃に、それを行うのが一般的だ。とはいえ、何時するかは当然自分たちで自由に決める。

となりのおやじは元気な年金生活者で、病身の妻をかばって敷地の入り口など、日常的にちりひとつ無いほど綺麗に掃ききよめる。庭仕事が好きそうなのも結構だが、難は自分の意見を他人に押しつけてくることだ。

さて垣根だが、毎年、先に手をつけるおやじは、となりがすぐにあとを続けることを期待する。今年は我が家側では夏になってしまい、ある日曜日に手入れを始めた。その気配を知ったおやじはすぐさま我が家へかけつけ、手入れを始めるが遅いことの不平を述べた。去年も遅かったので、その間中、伸びた垣根を毎日見ざるをえず、どれだけ精神衛生に悪かったかをとうとうと述べ立てるのだ。

話しているうちにだんだんと興奮してきたようで、垣根の世話ができないのは夫の性格に欠陥があるためと言い出した。

おやじによると、夫の性格には二つの欠陥があ

る。不幸な子供時代を過ごしたことと、女房の尻にひかれているという二つである。おやじのいうこれらの理由と、植木の手入れとの関連性がどこにあるのか理解に苦しむが、おやじは本気でそう思っているらしい。

そもそもこのおやじは近所の嫌われ者である。子供たちがサッカーのボールを敷地に転がすと車を傷つけたと怒るし、また、誰かが車のアイドリングを少し長くしていると(規定では2分までOK)環境に悪いとどなりこみに行く。

札付きおやじのとなりに、たまたま引っ越してきた我々は運が悪いのだが、じつは全国的に敷地の境界線についてが、となり近所と仲たがいになる最大の理由といわれている。

となりの庭木のおかげで庭の日当たりがわるくい。落ち葉が自分の庭や池・プールに落ちる、などが一番多い理由である。そんな話がつれると裁判沙汰になることもあると聞く。

となりのおやじなど、自分の菜園にやる水を我が家の敷地から伸びている木の根が吸い上げるので、それを切れとやってきた。引っ越ししてすぐのことで、となりと不仲にはなりたくないし、おやじのいう雑木は別に重要でなかったのに、要求を受け入れ、それを切ったことがある。ところがそのあとがいけない。名前は知らないが、なんとその木は切られた「仕返し」に辺り一帯に無数の新芽をふき出させたのである。放っておくと何十



(問題の「垣根」)

という新木になるので、その年はタケノコ堀ではないが、ずっとスコップを手離せなかった。こちらにとっては、理由にならないおやじの言い分を受け入れたおかげで、無駄な骨折り仕事を増やしたことになる。

ほかにも何本か切らされたが、もっと木を切れ、切らないとコニユーン(自治体)に訴えるなどと要求はとどまるところを知らずで、両家の関係は徐々に悪化し、ついには口をきかない間柄となった。聞くところによると、我が家の前の住人と境界線の引き方についてトラブルがあり、やはり陰険な関係であったらしい。思いがけない「伝統」を引き継いだようだ。

以来、となりのおやじは、我が家を訪れることを禁止されたのを大人しく守り、時々、タイプした手紙を我が家の郵便受けに入れるようになった。相変わらず、要求をのまないと訴えるという脅しであるが、いままでどこからも調査にはきていない。

他に隣接する家屋が前後左右にあるが、このようなトラブルはこのクソおやじ以外とはない。いったいにスウェーデン人は衝突をきらい、紛争を避ける傾向にあるので、我が隣人はかなり珍しい存在である。

他の隣人との付き合いは、かなりふつうにやっている。一番多いのが、留守にするときの助け合いである。家を空けるときの、一番に必要ななるの

が敷地の芝生刈りである。空き巣狙いは芝生の手入れ具合を見ると言われているし、なによりも、ぼうぼうの芝生は周りへのエチケットに反する。花の水遣りや、郵便受けを空にしておくことも大切である。おやじの家の反対側の隣人はウサギを飼っており、その世話もひきうけるが、代わりに我が家の鯉に餌をやってくれる。

ところで、こちら側の隣人との境界線はうんと長く、ずっと前に建てられたらしい鉄柵がぼろぼろの状態で、一部は倒れたまま放置されているが、どちら側も別に気にしない。お金ができれば新しい柵を作りましょうと、時々話す程度である。

ここスウェーデンは日本の1.2倍の国土に9百万の人口が住むだけなので、広い敷地などいつもありがたいとは思われない。不動産の広告などをみていると、「手入れの簡単な庭」などと書かれてあるが、そんな時は庭が小さい場合が多い。夫婦ともに仕事を持つのが普通だし、小さい子供がいたりすると忙しく、とても庭の世話などしておられない。そんな時小さい敷地はなにかと便利なのである。

敷地は隣家との最大のトラブルのもとになるといわれているが、この近辺での事例はとなりのおやじだけで、わずかな敷地の所有にこだわるおやじはやはり珍しい存在だ。となりの庭から落ちてきた半腐りの林檎を投げ返しながら考えた。